

遠山元一旧邸（遠山記念館）庭園の構成・意匠の特色と文化財としての学術上の価値

Consideration of the former Gen-ichi Toyama Residence (Toyama Memorial Museum) Garden with regards to the design features and the intrinsic value as a cultural property

栗野 隆* 秋山 陽香*

Takashi AWANO Haruka AKIYAMA

Abstract: This paper researches the former Gen-ichi Toyama Residence (Toyama Memorial Museum) Garden to define the composition, design and materials and discuss its value as a cultural property. The main discussion points are as follows; (1) Formality and Tradition: The garden has the family shrine in the north-east corner (Kimon), and the family cemetery in the south-west corner (Ura-kimon). The buildings were positioned around the northern area like flying gees (Gankougata), the main garden was designed in the southern area. (2) Totality of the composition: the garden has 6 areas, and they were positioned with buildings harmoniously. The composition has a spatial unity, physically and visually. (3) Modernity and sophistication: We can see general modern garden style features in the wide lawns and the curving streams. Additionally, the techniques of step stones in the stream, shore stones and artificial stone objects are sophisticated. (4) Continuance from the Showa period to the present: The sculptures and a museum from the late 20th century were located in the garden, the original garden form was kept well. These were the elements also seen in as the Toyama memorial museum garden. We can follow the history of the garden from the physical aspects.

Keywords: modern garden, modern Japanese style, Gen-ichi Toyama, Toyama Memorial Museum

キーワード: 近代庭園, 近代和風, 遠山元一, 遠山記念館

1. 研究の目的と方法

埼玉県の近代庭園で名勝指定を受けたものは皆無である（平成29年3月現在）。ただし、文化庁記念物課『近代の庭園・公園等に関する調査研究報告書』（2012）には、近代埼玉の11庭園が1次選定事例の一覧表に記載され、国または地方公共団体による指定・登録の候補として示された¹⁾。なかでも遠山元一（日興證券創業者、現・SMB C日興証券）の旧邸庭園は、「遠山記念館庭園」の名称で重要事例と評価された。しかし本庭園については、建築の造営年代や意匠・技法・材料の一端が知られるが^{2) 3)}、庭園に関する学術的知見は一部の石造物のみで⁴⁾、庭園の文化財としての価値の具体的検討はおこなわれていない。

そこで本論文は、遠山元一旧邸庭園の構成・意匠の特色を把握し、文化財としての価値を考察することを目的とした。文化財保護法では、名勝地を「芸術上又は観賞上価値の高いもの」とし、指定基準では庭園等の人文的な名勝について「芸術的あるいは学術的価値の高いもの」としている。特に近代以降に造られた庭園については、芸術上又は観賞上の価値の捉え方として、(1)現状の地形、地割、植物、水、石組、構造物等の諸要素が組み合わさり、独特の景観構成を示していること、(2)当該地方の風土的特色により、独特の景観を示していることを考慮すること¹⁾が示されている。学術上の価値の評価にあたっては、(1)現状の地形、地割、植物、水系、石組、構造物等が作庭当初のものを継承するとともに、作庭後における重要な変遷の経過をも示していること、

(2)作庭及びその後の変遷の経緯等の観点から特質を有するなど、庭園史上における時代的特質を表していること。また、それらに係る資料（文献、写真、図面等）が残されていること、(3)地域性の観点から特質を有していること、の3点を踏まえ、庭園の施主や用途等の区分を考慮して検討すること¹⁾とされている。なお、遠山元一旧邸庭園は「地方の地主・資産家等の庭園」に区分でき、作庭当初の姿を伝える図面、写真が残る。

上記をふまえて本論文では、庭園の造営経緯を確認しつつ、庭

園の地割を明確にし、各地割を構成する個々の要素と、それらが組み合わせられた意匠と材料（庭石、石造物、植栽）の種類を把握し、特に本庭園の学術上の価値を考察することとした⁵⁾。

研究方法は、庭園の現地観察、遠山記念館所蔵の残存図面と16葉の古写真の観察、遠山記念館学芸員への聞き取り調査とした。

2. 庭園の造営経緯

(1) 生家の庭園

遠山元一旧邸は、三保谷村大字白井沼（現・比企郡川島町白井沼）に建つ。一帯は川島という地名で呼ばれるように、荒川、市野川、越辺川、入間川という川に囲まれた荒川低地であり、川島郷と呼ばれた広大な武蔵野の面影を留めた農村に立地する。当地に営まれた遠山元一生家は、遠山家の没落ともなって人手にわたり失われた⁶⁾が、生家の様子は次の元一に手記によって分かる。

手記には、「田舎であるがゆえに、屋敷が数千坪もあり、広大なおもやを中心にして幾棟かの土蔵が軒をつらね、大時代的な門構えから周囲にずっと塀をめぐる規模は、さながらひとつの城郭のようでもあった。門から玄関までの内庭の一部や、裏まわりには鬱蒼たる杉林があつて、子供ごころには夕方など、そこをとおるのがこわくてたまらなかつた」⁷⁾とあり、広闊な田圃に、森閑とした豪農の屋敷が建っていたことが分かる。

元一の母・美以が援助した画家・五十嵐勝雲が開き書きした「遠山家旧家想像の図」（『御母堂遠山美以刀自記念画帖』所収）⁸⁾には、邸宅の南の農地、敷地の南に開く長屋門、その北に構えられた主屋と土蔵群、敷地西側の池、北の杉木立が確認できる。さらに、池の周囲を中心に梅が植えられた印象的な情景が示すように、元一の生家は「梅屋敷」として村民からも親しまれていたようである。しかし、当地が人手にわたってからは背後の杉林が旧態を偲ぶのみで水田と桑畑に転用されてしまった⁹⁾。

(2) 庭園の造営

元一は後に川島屋商店を興して一連的な成功をおさめ、当地を

*東京農業大学地域環境科学部

周辺も含めて買い戻した。昭和8年9月26日に本邸の建設が着手された。建設にあたり、敷地を東西方向に貫通していた道路は替地を提供して南側への移動が可能となり、現在の庭園の南半部分の拡張がなされた。また、本地域は河川の氾濫に古来より悩まされた水害地であったため、敷地全体を平均3尺盛土し、下層は田土等の粘土で地業をほどこしつつ、上層は庭木の生育に便宜を図るために遠方より畑土を購入して地盤改良にあたった¹⁰⁾。

庭園の完成は、邸宅全体が完成した昭和11年4月に刊行された『遠山家本宅新築落成記念写真帳』¹¹⁾に完成後の庭園の様子も写真で記録されていることから、建築の完成と同時期の昭和11年と指摘できる。作庭の直接的な関係者としては、総監督をつとめた元一の弟・遠山芳雄、作庭の実際を担当したのは龍見清吉という庭師であった¹⁰⁾。しかし龍見清吉という庭師は東京に在住していたという情報を知るのみで、その人物像に不明の点を残した。

3. 敷地計画と庭園の地割

(1) 敷地計画

遠山元一旧邸全体の敷地計画は、「遠山邸建築設計図 建物配置図」¹²⁾から把握できる。敷地外周は南側の池から連続して、北・東・西の3面を水路が取り囲んでいた。主屋3棟（東棟、中棟、西棟）は敷地北端に雁行形に配置され、南に表門（長屋門）、西に裏門（西門）が開いた。敷地の南東隅にも水路に橋が架けられ、出入口が開いていることが確認できる。庭園は主屋に南面して大きく確保するという敷地計画がなされた。

本敷地の鬼門にあたる北東隅には屋敷神が鎮座し、裏鬼門の南

西隅には遠山家の墓所が祀られていることから、正統で伝統的な敷地計画であると指摘できる。図-1として掲げた遠山記念館に伝わる遠山邸庭園の実測図（図面名称がないため、以下「実測図」と呼称）¹³⁾を見ると稲荷は社が南面し、墓所では墓石が東面している点も、その伝統性をうかがわせるものである。

(2) 庭園の地割

上記の実測図は、庭園の地割も詳細に描かれている。作成年代は不明であるが、昭和45年に建設された美術館と事務所棟が記載されていないため、これ以前に作成されたものと指摘できる。ただし、地割や構成の平面形状は詳細に表現されているが、護岸石や飛石は古写真と比較すると模式化されていると見られる。実測図には、全体敷地が3,073.4坪（10,160㎡）と記載される。主屋3棟や長屋門といった主要建築の建坪を除くと、およそ2,800坪（約9,000㎡）の庭園が確保されていることになる。

庭園の地割は、建築の用途とその配置関係、実測図に記載された庭園の様子から、次の6つに区分することができた。

- イ) 表庭：敷地に南面する道路から表門およびその付属堀に至るまでの範囲の庭。
- ロ) 前庭：表門から東棟表玄関に至るまでの範囲の庭。
- ハ) 主庭：庭門とその付属堀に東接し、主屋に南面した庭。
- ニ) 茶庭：寄付、雪隠、腰掛、茶室周辺に展開した露地。
- ホ) 東裏庭：敷地の東にあたるバックヤード、ストックヤードとしての機能を有する庭。
- ヘ) 北裏庭：敷地の北にあたるバックヤード、ストックヤードとしての機能を有する庭。

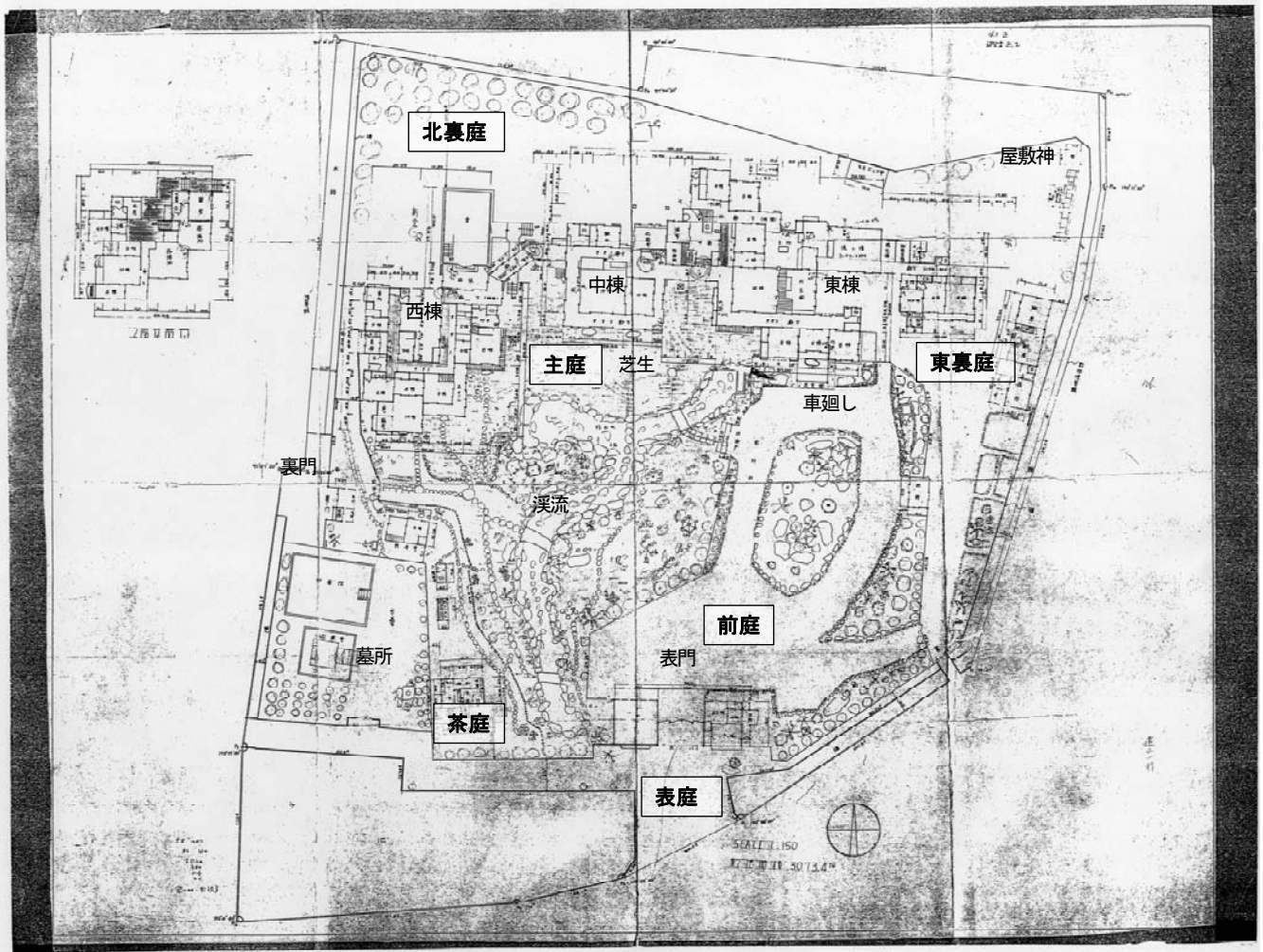


図-1 遠山元一旧邸庭園実測図（作成年代は昭和45年以前、遠山記念館所蔵）

上記について図面と現地を確認した結果、東裏庭を除き庭園の地割、地形は大きな改変を受けていないことが分かった。

4. 庭園の構成と意匠

この章では、各地割の構成と意匠、要素を実測図・古写真を参照して述べつつ、その保存状況について書く。

(1) 表庭

表庭は、表門とその両脇東西に延びる塀の南側に当たる。実測図から、通路、池、堀、植栽地から構成され、古写真から通路は砂利敷きとし、池と堀は直線護岸であったことが分かる。その護岸の平面形状は保存されている。現状では、塀と池・堀との間には3.3m程度の犬走り状の空地が確保され、卵漆喰の塀の南側にクロマツが点植される。表門の東手前には門冠りの松が長屋門の瓦葺の屋根を隠しさせる。門と塀前のクロマツは昭和11年竣工時の古写真¹¹⁾にも確認されることから(図-2イ)、表庭の池、クロマツの植栽、漆喰塀も旧状を留めていることが分かった。

(2) 前庭

前庭は、表門から東棟玄関に至るまでの南北40m程度の庭である。実測図から、通路は砂利敷きにし、式台玄関の前に南北20m、東西11mの車廻しを設け、車廻しの西に主庭への庭門を開く構成が見える。前庭の中央を占める車廻しは、式台の沓脱石(鞍馬石)からの景色を意識して築造されたことが古写真(図-2ハ)からうかがえ、濡鷲形と春日形の石燈籠、捨石(秩父石)を設ける。昭和11年の古写真(図-2ハ)には、シイの古木が見られる。庭門の南北には塀が接続し、前庭と主庭との境界を施す。実測図では前庭の東側は植栽地であり、伴待が植栽地中央に建つ。伴待以北の植栽地には実測図に井筒をとまなう池が見える。

現状を確認したところ、車廻しは一部の植栽(シイの古木)を除いて平面形状は完存し、砂利敷き通路は美術館への展覧動線として部分的に舗装された通路が付加されたものの、その線形は保存されていることが分かった。東側の植栽地は、北縁の一部が美術館の入口として失われ、伴待が移築されたが、それ以外の植栽地の地割、井筒が保存されている。伴待も美術館北側の四阿として残存する。

東側の植栽地北半の枯池は、現状では南北7m、東西2m程度である。枯池北縁の井筒は雄側石、雌側石とも鼻を出す受け組(鞍馬石)で、井戸構えに水汲石と桶石を配した正統な石組とする。

(3) 主庭

東棟、中棟、西棟の南面に構成された主庭が、本庭園の中心となっている。実測図と古写真から、主要構成として主屋3棟に付属する軒内、芝生、南北方向に蛇行する溪流、溪流の東の植栽地からなり、溪流を中心に主庭全体が構成される点が判明する。水面の周囲は飛石園路で一通り巡ることが可能な池泉式平庭である。

1) 軒内

実測図では、主屋3棟前に沓脱石が打たれ、古写真から中棟、西棟には鉢前が組まれる(ただし実測図には中棟の鉢前は見えぬ)。現状では、両鉢前が残存し、それ以外にも中棟にもう1基、東棟に1基鉢前が認められた。古写真に写らない鉢前の作庭時における存否については、中棟のものについては鉢明かりの燈籠が実測図に見える点、東棟に関しては縁側が実測図に描かれている点から、作庭当初から組まれた鉢前が現存している蓋然性が指摘できる。なお、現状では建物の前にウメが点在し、作庭当初の植栽かどうかは判然としないが、この地が「梅屋敷」としての由来を暗示させる植栽として重要な要素となっていると評価できる。

2) 芝生

芝生は中棟に南面する(図-2ホ)。日本近代の富豪層や上流階級の庭園では園遊会や異なる建築様式を調和させるために芝生が好まれたが¹⁴⁾、本庭園もその構成を備える。作庭当初、芝生

の生育は不良であったが、元一はゴルフ場経営もしていたので、そのゴルフ場の芝生を移植して園地を保った¹⁵⁾。現状では、芝生は溪流に至るまで先下がり呈する。芝生に方形の飛石が打たれ、中棟南に石製の卓と椅子がある。これらは彫刻家・流政之作で2代館長で元一の長子・遠山一行が設けた¹⁵⁾。

3) 溪流

実測図と古写真から、溪流は北端に水源を持ち、主庭をほぼ南北に流れる。源泉部に井筒を流れ蹲踞のように設け、鉢明かりとして朝鮮形燈籠を据える(図-2ニ)。この給水は玄関裏の井戸小屋にある自噴井戸の水を廻していた¹⁵⁾。井筒は雄側石と雌側石の鼻を出した四角受け組で石種は伊勢御影とする。護岸石は伏石とし、拳大から人頭大の底石を撒く点を読み取れる。溪流の中流部は、西方向に突出した枯池を接続し、元藤堂家にあった六角受け組の井筒を隣接させる(図-2ト)。この構成は現状でも完存している。実測図から確認できた独特の意匠は、南流する溪流内に沢飛石の流れの方向に打った点である。流れを横切らず、流れの中を歩けるように打った事例には、大阪の藤田伝三郎邸庭園¹⁶⁾、新潟の齋藤喜十郎別邸庭園¹⁷⁾が知られるように、近代和風庭園の沢飛石の自在さ、すなわち数寄者の庭園趣味を示すものといえる。

現状では溪流の流路内には水量の減少にともなって流れと枯流れとが並存するような意匠に改造され、沢飛石も不明瞭となっているものの、当初の基本的意匠は残っていることが確認できた。

4) 植栽地

植栽地は実測図には数種類の高木表現があるが樹種が判然としないため保存状況は判断できない。ただし植栽地に現存するラカンマキは、中棟1階18帖の床中央と正対して植栽された樹木で¹⁵⁾、建築と庭園とが一体的に造営されたことが確認できた。

(4) 茶庭

主庭と遠山家墓所に挟まれた敷地南西を占めるのが茶庭である。実測図では、寄付、雪隠、腰掛、茶室(裏千家・亀山宗月設計、昭和12年竣工¹⁵⁾)がほぼ南北方向に建ち、その東面に飛石園路が設けられ、現状では生垣(実測図では「タケガキ」)で区画されているが、前庭や主庭と比較して窮屈な建物配置と動線設定がなされたように見受けられる。この点を考慮すると、敷地計画にあたっては墓所が先行して占地位置が定められ、その後茶に關係する施設、庭園の位置が設定された可能性が考えられる。

実測図ならびに現状では、寄付、雪隠、腰掛の諸施設と茶室との間には区画施設がなく、一条の飛石園路で連絡される。諸施設の配備を考慮すれば外露地と内露地とに区分されるべきであるが、形式的には一重露地とした点に、窮屈な敷地計画が故の策が反映されたと推察される。

(5) 東裏庭・北裏庭

東裏庭は、現在は美術館が建ち、現存しない。実測図には、表門の東方に延びる通路があり、出入口から北に延びる塀の東側に形成された庭であった。庭は通路状で納屋が建っていた。実測図

表-1 古写真と現状を比較した庭石の残存状況

区分	庭石の種別	①残存	②移動	③消失
前庭	景石 (3)	3	0	0
	飛石 (1)	1	0	0
	縁石 (50)	41	9	0
主庭	景石 (24)	21	0	3
	飛石 (140)	117	11	12
	縁石 (6)	6	0	0
	護岸石 (53)	48	4	1

庭石の括弧内数字は古写真に撮影された石の個数を示す。

①古写真に確認され、当初どおり残存している。

②古写真に確認されるが、位置、向きが異なる。

③古写真に確認されるが、現状では失われている。



イ) 表庭と表門



ロ) 東棟式台玄関と前庭



ハ) 前庭の車廻し



ニ) 主庭を南流する溪流の源泉部



ホ) 中棟に南面した芝生園地



ヘ) 主庭溪流中流部の配石と雪見燈籠



ト) 藤堂家伝来の井筒（六角受け組）と枯池の様子



チ) 中棟2階から見下ろした主庭の様子

図-2 遠山元一旧邸庭園の古写真の一部（出典：『遠山家本宅新築落成記念写真帳』昭和11年，遠山記念館所蔵）

表-2 現地調査から判明した庭園内の燈籠

形式	笠石	高さ	位置、備考
濡鷲形	六角形	2.7	前庭・表玄関前車廻し、四国花崗岩
春日形	六角形	3.9	前庭・表玄関前車廻し
鉄製灯籠	丸形	0.8	前庭・表玄関前車廻し
春日形	六角形	2.4	主庭・枝折戸西 植込み
朝鮮形	四角形	1.8	主庭・溪流北端 井筒鉢明かり
春日形	六角形	3.4	主庭・枝折戸南 植込み
雪見形	六角形	1.5	主庭・溪流中央 東岸、四国花崗岩
西ノ屋形	四角形	2.1	主庭・中棟東面
西ノ屋形	四角形	1.8	主庭・中棟西 鉢前鉢明かり
利休形	六角形	2.0	主庭・西棟東面
寸松庵形	六角形	1.9	主庭・西棟南西 六角形井筒鉢明かり
自然石道しるべ形		1.2	主庭・西棟南西 植込み
四角形	四角形	1.4	主庭・西棟南
春日形	六角形	2.3	主庭・溪流中央東 植込み
春日形	六角形	1.8	主庭・西棟南面 鉢前鉢明かり、関西花崗岩
春日形	六角形	1.6	茶庭・寄付待合西
平等院形	六角形	2.2	中棟中庭
六角形	六角形	1.4	茶庭・寄付待合北
四角形	四角形	1.6	茶庭・腰掛待合東
織部形	四角形	1.4	茶庭・腰掛待合東 蹲踞鉢明かり
袖形	四角形	1.4	主庭・溪流中央園路脇

注：高さの単位はメートル。

表-3 現地調査から判明した庭園内の石造物

分類	形式	高さ	幅	位置、備考
石塔	十三重層塔	4.6	0.7	主庭・南東 植込み
井筒	四角受け組	0.6	1.2	前庭・東植込み、井戸構え
	四角受け組	0.6	1.4	主庭・溪流北端、井戸構え
	六角受け組	0.4	1.4	主庭・西棟南西、井戸構え、元藤堂家所蔵
手水鉢	自然石	1.0	1.0	主庭・東棟南西隅、鉢前（水琴窟）
	自然石	1.4	0.7	主庭・中棟東縁、鉢前
	笠形	1.3	0.9	主庭・中棟西縁、鉢前。高さは3石分の総高
	自然石	0.8	1.4	主庭・西棟東縁、鉢前
	自然石	0.4	0.8	主庭・西棟南、向鉢蹲踞
	橐形	0.9	0.8	主庭・西棟南縁、鉢前
	笠形	0.3	0.4	茶庭・雪隠北、中鉢蹲踞
	四方仏形	0.4	0.4	茶庭・南端、中鉢蹲踞
	唐船形	0.6	1.4	茶庭・寄付待合西、向鉢蹲踞
	石像	布袋像	0.9	0.6
加工飛石・踏石	伽藍石	—	0.6~1.2	主庭・園路踏分石（8石）、燈籠火あげ石（1石）、茶庭蹲踞前石（1石）として、10石を確認。
	臼石	—	0.4	主庭・園路踏分石
	延段まげ石	—	—	茶庭・北延段に木炭を模したまげ石として、9石を確認。
彫刻作品	方形飛石	—	0.6~0.4	主庭・芝生、流政之作。
	短冊形飛石	—	0.6×0.3	主庭・芝生、流政之作。
	作品名碑	0.6	0.3	主庭・溪流北縁付近、流政之作。
	石卓	0.4	0.9	主庭・中棟南芝生、流政之作。
	石椅子	0.4	0.5	主庭・中棟南芝生、流政之作（4基）。幅は直径。
	記念物	0.6	1.8×1.2	主庭・溪流中央園地、流政之作「みいこいし」。
雨受石	円形	—	0.8、1.1	美術館北・今井兼次作（2基）。
	角丸長方形	—	1.3	美術館南・今井兼次作。

注：高さと幅の単位はメートル。

表-4 現地調査から判明した庭園の植栽樹種（左側：高木類、右側：低木類）

種別	和名	学名
常緑針葉樹	アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>
	カヤ	<i>Torreya nucifera</i>
	クロマツ	<i>Pinus thunbergii</i>
	ゴヨウマツ	<i>Pinus parviflora</i>
	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>
	ヒバ	<i>Thujopsis dolabrata</i>
	ラカンマキ	<i>Podocarpus macrophyllus</i>
常緑広葉樹	スダジイ	<i>Castanopsis sieboldii</i>
	タラヨウ	<i>Ilex latifolia</i>
	ツバキ	<i>Camellia japonica</i>
	モチノキ	<i>Ilex integra</i>
	モッコク	<i>Ternstroemia gymnanthera</i>
	サザンカ	<i>Camellia sasanqua</i>
落葉広葉樹	ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i>
	イロハモミジ	<i>Acer palmatum</i>
	ウメ	<i>Armeniaca mume</i>
	カキノキ	<i>Diospyros kaki</i>
	ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i>
	ソメイヨシノ	<i>Cerasus x yedoensis</i>
	ハクモクレン	<i>Magnolia denudata</i>

種別	和名	学名
針葉樹	キャラボク	<i>Taxus cuspidata</i>
常緑広葉樹	アオキ	<i>Aucuba japonica</i>
	アセビ	<i>Pieris japonica</i>
	コデマリ	<i>Spiraea cantoniensis</i>
	サツキツツジ	<i>Rhododendron indicum</i>
	ドウダンツツジ	<i>Enkianthus perulatus</i>
	ナンテン	<i>Nandina domestica</i>
	ニシキギ	<i>Euonymus alatus</i>
	ヒイラギ	<i>Osmanthus heterophyllus</i>
広葉樹	ヤツデ	<i>Fatsia japonica</i>
	ウメモドキ	<i>Ilex serrata</i>
	ボケ	<i>Chaenomeles speciosa</i>
笹類	ユキヤナギ	<i>Spiraea thunbergii</i>
	オカメザサ	<i>Shibataea kumasasa</i>
	クマザサ	<i>Sasa veitchii</i>

【凡例】 学名は、邑田仁監修『新訂原色樹木大圖鑑』（北隆館、2004年）を参考にした。

に確認される植栽地には落葉樹が植栽されていたことがうかがわれ、通称ここが「もみじだに」と呼ばれていた¹⁵⁾ことを考慮すると、モミジが植栽された空間であったと思われる。

北裏庭は東棟、中棟、土蔵背面に形成されている。現状では事務所が北裏庭東半に建ち、西半は植栽地と空閑地である。植栽には、複数のスギが確認でき、本邸造営前もスギが当該地に生育していた⁸⁾ことから、植栽は部分的に継承されていると見られる。

5. 庭園材料

(1) 庭石

室岡惣七「落成所感」¹⁰⁾から、庭石は比企郡平村産のものをを用い、特殊材は近畿地方産を用いたことが判明する。平村は遠山家没落時に元一の母・美以が教員を務めていたことから村人から慕われ、本邸再建に際して名石を多数贈られたらしい¹⁵⁾。特に本庭園には鞍馬石(花崗岩、京都産)がふんだんに用いられており、表庭の井筒のほか、東棟、中棟、西棟の沓脱石は悉く鞍馬石とする。伊勢御影(花崗岩、三重県)も多く、園内の捨石、景石のほか、溪流北端の井筒と西棟鉢前の橐形縁先水鉢も伊勢御影である。表玄関前の車廻しや溪流に秩父石が用いられ、車廻し内の濡鷺燈籠、溪流中央部の雪見燈籠はともに四国花崗岩製であった。

古写真には、前庭と主庭に多数の庭石が映っている。そこで、前庭と主庭の庭石について現地と古写真とを照合し、現存状況を確認した。その結果、前庭は54石のうち45石(83.3%)が位置も変わらず現存しており、主庭は223石のうち192石(86.1%)が位置も変わらず残っていることが判明した(表-1)。したがって、庭石からみると庭園の保存状況は極めて良好であるといえる。

(2) 燈籠

本庭園には、21基の燈籠が現地調査で確認できた(表-2)。そのうち1基は鉄製燈籠である。形式については、六角形(12基)としては春日形、濡鷺形、利休形、寸杉庵形、雪見形、平等院形が確認される。四角形(7基)については、朝鮮形、織部形、西ノ屋形、袖形が見られる。朝鮮形は近代数寄者の庭に好んで用いられた燈籠である。独特なものでは、自然石を道しるべのように加工した燈籠が西棟南西に確認される。

茶庭に据えられた燈籠を除き、燈籠の火袋には電燈が仕込まれていたことが久保木氏によって指摘されている⁴⁾。昭和初期の近代技術を庭園に取り入れた点で注目される。

(3) その他の石造物

庭園内には、石塔1基、井筒3基、手水鉢9基、石造1基、加工飛石・踏石(20石)、彫刻家・流政之作の彫刻作品、建築家・今井兼次作の雨受石があり、多様な石造物で庭園が構成されていることが分かる(表-3)。

伝来品としては、伊勢津の藩主・藤堂家から松浦伯爵家を経て遠山家の手に渡ったもの⁴⁾が含まれる。六角受け組井筒(主庭西棟南西)、中棟西縁鉢前の笠形手水鉢等である。伽藍石は建物礎石の転用のほか庭園用に加工した庭伽藍も近代和風庭園に流行した¹⁸⁾が、本庭園では藤堂家伝来の3石の伽藍石を含め、主庭園路踏分石、燈籠火あげ石、茶庭躊躇前石など計10石と数多くの利用が見られた。そのほか、端正な姿で主庭に建つ三重層塔、西棟南縁の橐形手水鉢と茶庭寄付西の唐船形手水鉢に見られる瀟洒な形、茶庭南端の四方仏形手水鉢の彫りの素朴さが、石造物として特筆される。なお、流政之と今井兼次による20世紀後半の石造物は、遠山家の庭園から現在の遠山記念館に至る履歴を具体的に辿れる庭園構成要素として意味を有するものと評価できる。

(4) 植栽

室岡惣七「落成所感」¹⁰⁾によれば、庭木として埼玉では岩槻および桶川付近、神奈川の厚木付近から調達された。主な植栽樹種について、高木では常緑針葉樹7種類、常緑広葉樹7種類、落葉

広葉樹6種類が確認でき、低木では常緑針葉樹1種類、常緑広葉樹9種類、落葉広葉樹3種類、笹類2種類が確認できた(表-4)。

主庭、表庭、茶庭の植栽地に共通する樹種構成としては、上木をアカマツ、クロマツで樹冠を形成しつつ、中木としてモチノキ、モッコクといった葉に光沢がある常緑の伝統的な庭木で背景となる濃緑の緑を創出している点が特色として指摘できる。

6. 庭園の構成・意匠の特色と価値

以上の結果から、遠山元一旧邸の庭園は、次のような構成・意匠上の特色と文化財としての学術上の価値が指摘できる。

- イ) 敷地計画の正統性と伝統性：敷地の北東隅(鬼門)と南西隅(裏鬼門)にそれぞれ屋敷神と墓所を設け、雁行形の建築群の南面に庭園空間を確保するという正統かつ伝統的な敷地計画とし、現在まで完結した状況で保存されている。
- ロ) 保存された地割の良好性：敷地の用途や建築の性格に合わせて、表庭、前庭、主庭、茶庭、裏庭という景趣、役割の異なる庭が配置され、特に観賞に関わる表庭、前庭、主庭、茶庭が良好に継承されている。
- ハ) 庭園構成・意匠と技術の近代性：広々と確保された芝生や溪流が主要構成をなしている点に同時代の近代住宅の庭園の特色となる地割設定が見られ、特に石燈籠には電燈を灯して夜間の景観演出を図ろうとした点に昭和初期の造園技術の近代性を見て取ることができ、庭園史上における時代的特質を表しているものと見られる。
- ニ) 近代から現代の庭園の連続性：明治期の「梅屋敷」であった頃から継承されたと考えられる北裏庭のスギ林が部分的に残存し、遠山元一旧邸の庭園の構成とともに、20世紀後半の遠山記念館庭園として彫刻作品が配置され、近代から現代に至るまでの庭園の履歴が重層的に辿れる。
- ホ) 庭園の地域性：川島という氾濫の多発した地域性を考慮した造成工事により作庭され、特殊材を除く庭石は庭園の近隣であり遠山家とも縁がある地域(旧・比企群平村)から調達されたものが利用されている。

謝辞：本論文を作成するにあたり、調査にご配慮・ご協力をいただいた遠山記念館学芸員の久保木彰一氏と依田徹氏、ならびに東京建具協同組合事務局長の稲村末松氏に感謝申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費 15K21392 の助成を受けたものです。

補注及び引用文献

- 1) 近代の庭園・公園等の調査に関する検討会(2012)：近代の庭園・公園等に関する調査研究報告書：文化庁文化財部記念物課
- 2) 遠山記念館編(1995)：和風建築の粋：遠山記念館
- 3) 久保木彰一編(2012)：遠山元一と近代和風建築：遠山記念館
- 4) 久保木彰一(1999)：手水鉢と遠州文：遠山記念館だより(16)：遠山記念館、pp.4-10
- 5) 「芸術上の価値」における庭園の「諸要素が組み合わせる」状況と「独特の景観構成」、「風土的特色」による「独特の景観」の立証日本学会の研究論文として客観的な論述が困難であったため、本稿では学術上の価値の立証に目的を置いた。
- 6) 牧野武夫(1964)：遠山元一：時事通信社、pp.33-38
- 7) 遠山元一(1955)：兜町から：牧野書店、p.45
- 8) 五十嵐勝雲作「遠山家旧家想像の図」『御母堂遠山美以刀自記念画帖』(久保木彰一編『遠山元一と近代和風建築』所収、遠山記念館、2012年)
- 9) 遠山元一(1955)：兜町から：牧野書店、pp.101-102
- 10) 室岡惣七(1936)：落成所感(『遠山家本宅新築落成記念写真帳』所収)
- 11) 遠山家(1936)：遠山家本宅新築落成記念写真帳(遠山記念館所蔵)
- 12) 「遠山邸建築設計図 建物配置図」(1936年、縮尺100分の1、遠山記念館所蔵)
- 13) 「遠山邸庭園実測図」(作成年代は1970年以前、遠山記念館所蔵)
- 14) 栗野隆(2010)：近代の庭園：歴史と地理 632 日本史の研究 228、pp.18-27
- 15) 久保木彰一氏・依田徹氏への聞き取り調査(2017年1月24日、同年9月19日)
- 16) 大阪市建設局・京都造形芸術大学日本庭園研究センター(2000)：毛馬桜之宮公園「藤田邸跡」整備こともなう調査報告書：大阪市
- 17) 東京農業大学国際日本庭園研究センター(2012)：旧齋藤家別邸庭園調査報告書：新編市
- 18) 栗野隆(2014)：近代庭園と和風の革新：月刊文化財(614)：第一法規、pp.15-17